

書評

ブラフォード著『十八世紀のドイツ 文
學復興の社會的背景』

W. H. Bruford: Germany in the eighteenth century. The social background of the literary Revival. (Cambridge, 1952.)

大畑末吉

十八世紀の初頭一七〇一年にブランデンブルク選挙侯フリードリヒ三世がフリードリヒ一世となってプロイセン王に即位し、同時にブランデンブルク・プロイセンがプロイセン王國になったこと、世紀の半ば一七四九年にゲーテが生まれたこと、世紀の終り一七八九年にフランス革命が勃發したこと、この三つの出来事は十八世紀のドイツの性格を示すものとしてなかなか意味深いように思われる。ゲーテの生誕はあたかも十八世紀を前半後半に分っているようである。ごく大ざっぱに言うならば、前半はプロイセン王國によって代表される啓蒙的絶対主義の興隆の時期で、他の小連邦はいずれもそれぞれの規模に應じてヴェルサイユかポツダムの模倣に汲々としていた。後半は

七年戦争（一七五六—一七六三年）終了後の啓蒙的絶対主義の完成期に對應してゲーテ・シラーの古典文學の興隆を見、世紀末のフランス革命に引きつづいて革命戦争によってドイツの封建的遺制を震撼させつつ新しい世紀に突入した時期である。

このように十八世紀のドイツは封建制から民主主義革命への目まぐるしい動搖に終始した。その社會的・政治的激流の底には、とくに世紀の前半には、中世的な停滞と暗黒の泥沼がよどんでいる。ゲーテを中心とする古典主義文學はこの泥沼にもかわらず、あるいはこの泥沼にこそ咲き出た花だったと言ふこともできよう。マイネッケはそのゲーテ論のはじめにこう言っている。

「ゲーテが十八世紀の半ばにフランクフルトに生まれ、そこで成長したことは、病み衰えてはいるが、なお大いに尊敬すべき多彩な過去のふところから生まれたことを意味する。」

この尊敬すべき多彩な、しかも病み衰えた過去を知らなくては十八世紀後半のドイツ文學のかがやかしい勃興を正しく把握することはむづかしいだろう。ドイツの後進性というものはしばしば言われることであるが、それがどのような社會的・政治的・經濟的背景を持つているかを、先進國イギリス・フランスとの比較において知ることがはるくドイツ文化のみならず、とくにドイツ文學を理解する上に必要なことである。

さて私がここに紹介しようと思う本書は、あたかもこの要求に應ずるかのよう、豊富な資料を提供して當時の世相を如實

に展開している。著者は序文のなかで言っている。

「本書はその讀者對象として、副題の示しているように、イギリスにおけるドイツ文學とドイツ思想の學徒をまず第一に豫想している。その主な目的は十八世紀ドイツ文學の社會學的研究のために資料を用意することである。そのために當時の社會の主要な階級と、それが生存しうる政治的經濟的條件とを敘述するのである。」

こうして著者はビーダーマン、フライターク、ランプレヒト、ゾンバルト、シュタインハウゼン等の著書を参照しながら、當時の人たち、とくにイギリス人の旅行家の回顧録やエッセイや旅行記などを十分に利用している。この意圖と方法の成果とはわれわれドイツ文學の學徒にとつても大いに意義あるように思われる。以上のような意圖のもとに本書の主要部分は當然「歴史的事實の敘述」に當てられてはいるが、著者の執筆の動機が最後の章「文學におよぼす政治的經濟的社會的要素の影響」にあることは明かである。そこではじめて著者の歴史觀にもとづく文學の流れが簡單ながら展開されているからである。私の關心も當然そこに集中されたのであるが、前述の意圖に應じて以下順を追うてその内容を紹介していきたい。

第一部 政治的構造と行政組織

第一章 小國分立主義——本章ではドイツの小國分立主義の原因を歴史的に求め、有名無實な「帝國」の實情が述べられる。

書 評

皇帝の權力が時代と共に弱體化するにともない、諸侯をはじめ自由都市、帝國騎士領などの權力が相對的に増大し、十八世紀の終りまでその情勢がつづく。J・J・モーザーの言葉が引用されている。「皇帝は「フイートの土地も持たず、一人の臣下も持たない。いかなる領邦も、皇帝の名において統治されず、また収入の源泉とはなりえなかつた。」

第二章 啓蒙的專制主義——啓蒙的專制君主の支配機構を、ワイマル公エルンスト・アウグスト、ゴータ公フリードリヒ二世、およびフリードリヒ大王等の日常生活に即して具體的に記述した後、絶對主義の目的と政策、ならびに行政機構の發展をたどる。ついで十八世紀半ばからの啓蒙思想下のフリードリヒ大王のプロイセン興隆のありさまを述べ、同時にその專制政治のベネヴォレントたる眞の意味を明かにする。七年戦争後におけるプロイセンの實例は、啓蒙思想のヒューマニズムの流布とともに、他の小國にも影響をおよぼさずにはいかなかった。その一例としてカール・アウグスト公治下のワイマルが取上げられる。そして、その小規模の國家財政のために、各方面の政策の不完全さと弱點とがよけいに露呈される。それはカール・アウグストの性情と相まってゲーテの獻身の行政的努力も水泡に歸せしめるほど強いものであつた。ここに著者はゲーテのイタリヤへの逃避の重要な原因を見ている。

第二部 社會の舊秩序、貴族と農民

第一章 貴族一般——十八世紀のはじめはドイツではまだ貴族、市民、農民の中世的身分制が厳然と存在し、ピラミッド型のヒエラルヒーを形づくっていた。このような階級の差の原因となる基盤はすでにほとんど消滅していたにもかかわらず、あるいは消滅したればこそ、ドイツではこの現象がカスト的な組織に硬化した。これらの貴族の特権のわずかながら列擧され、その外的表象である服装と、社會生活における尊嚴の維持方法が具體的に述べられる。しかしながら、文化の擔い手はすでに貴族の手をはなれて都市を中心とする市民階級に移りつつあった。貴族間における教育思想も一般にはなほ低く、とくに女子教育においてそうであった。『ウィルヘルム・マイスター』の「美しい魂」の告白は言う。

「私のまわりの人たちは學問のことは夢にも考えておりませんでした。ドイツの宮廷人であったこの階級の人たちは當時文化の片鱗さえ持っていませんでした。……學問のある女は笑われました。教育を受けた女さえ好かれませんでした。たぶんたくさんの無學な殿方たちを恥じ入らせることが失禮だと思われていたからでしょう。」

第二章 宮廷と宮廷人——本章においても著者はワイマル宮廷を例にとつて、宮廷の組織と宮廷人の機能とを、ついで狩獵、觀劇、舞踏會、宴會等に日を暮らす宮廷人の日常生活を詳細に述べる。このような宮廷ならびに宮廷人の保護が眞の創造的藝術にとつて持つ意義について、著者は「さげがたいわざわざ

い」として否定的な結論に達している。

第三章 農業經濟——著者は言う「宮廷生活の豪華さは經濟的には農業經濟の基盤の上に開花した。君主はその收入の過半を彼自身の所有地から、残りは税金から引き出した。そしてその負擔はたいいていの領邦では主として土地耕作者と小地主とに歸せられた。」農民の問題はそれ故「當時のドイツ文化の主要な物質的基礎を研究することであり、全國民のほとんど四分の三におよぶドイツ人の大部分の問題に關係する。」農民については、東ドイツと西・南ドイツとはその客觀條件が異なるので、當然別々に考察される。つぎに農民の自由については、著者によれば、天候依存と戰爭災害との危険にもかかわらず、眞の飢餓と失業とからの自由は、むしろ自由な都會人よりも多く認められる。「嚴密な意味では中世初期ならびに古代に見られるような眞の農奴はドイツには存在しなかった。農民の自由の制限の多くは、その起源を中世の農奴にはなくて、後の進展に、とくにエルベ東方のグーツヘルンシャフトに發している。」農民の解放運動はドイツでは十九世紀までたいした進歩を見せなかった。

第四章 農民——前述のように農奴という名に値しないといえ、農民の自給自足の生活が決して樂なものではなかったことは言うまでもない。彼らの保守性を支えるものはその共同體意識と三圃農法とである。都會人にとつて農民は常に *domine Bauer* だった。農村における教化機關の主なもの

牧師と小學教師であったが、その素質は低く、施設は十八世紀の終りまでみじめなありさまであった。それでも十八世紀の後半には、読み書きのできる農民の數も相當數にのぼった。

第五章 田

紳——十八世紀の秩序のドイツ社會には

宮廷貴族と農民とのあいだに、イギリスのスクワイアと同じような田カントリー・ジェントルマン紳が介在している。彼らは廣い土地を所有し小さな君主ほどの勢力を持っているものから、二、三エーカーの土地と住居としか持たないほとんど農民と區別のつかないようなものまでいろいろの層にわかれていた。しかし概して彼らの生活は安定し、その實直なすがたは、アイヒェンドルフをはじめドイツのピーダーマイアー文學のなかにしばしば登場する。

第三部 社會の新秩序、中産階級ミドルクラス

第一章 歴史的回顧——「われわれが中産階級という漠然とした語を適用しようとする社會層は、十八世紀のドイツではす

でに廣範圍に成長し、その内部の各層のあいだの差異もすでに明瞭に認められているが故に、その複雑な構造を理解するためには歴史的發展の研究が必要となる。」「中産階級もしくは市民ビルドゥーゲンの歴史はドイツ語の示すように都市の歴史である。」「こうして著者は都市の發達の歴史を展開する。次いで、ドイツでは十九世紀の後半まで影響の尾を引いている中世のギルド（ツンフト）の本質と性格とを述べ、中世都市のすがたを比較的によく保存しているフランクフルトの情況についてゲーテの『詩と眞

實』の記述を紹介する。さらに北方のハンザ都市と南方の金融都市とを對比してそれらの都市の繁榮も、イギリス・フランス兩國の國民意識の高揚と植民政策と、加うるに地理的發見による通商路の變更と、なかならず國內的には三十年戦争と、これら内外の情勢に後退を餘儀なくされる次第が詳述される。三十年戦争の傷手は（都市と村落の人口は三分の一から所よっては十分の一に減少した）十八世紀に至るまでいやされず、飢餓と疾病と道義の頹廢とを結果し、他方小邦君主たちはいたずらに生活の享樂を求め、外國模倣に終始し、貧富の差はますますひどくなった。

第二章 十八世紀のドイツ商工業ならびにその主要な中心——十八世紀のドイツの人口状態は、その經濟狀況が十九世紀末のそれよりも中世のそれに近いことを示している。その意味は經濟はなお地方的であった。ここで著者は十八世紀のドイツの交通、コミュニケーション、道路、橋梁、郵便制度、旅館、航路、河川運河等がイギリス・フランスとくらべていかに貧弱であったかを明かにする。その上ドイツはウェストファリア條約によって主要な河口港を失い、古い商業の中心であったハンザ諸都市が後退し、さらにヴェネチアの衰退に伴って南方の金融・自由都市も昔日のおもかげがうすくなった。その間にあってプロイセンの重商主義的政策は強力に押し進められ、ベルリンは急速に經濟的發展をとげた。ベルリンが啓蒙主義の中心となったのは偶然ではない。こうして古いギルド制度は實質的に

おとろえ、それに代って商工業の新たな中心としてハンブルク、スイス諸都市、ライプチヒ、フランクフルト、ベルリンが登場するようになる。

第三章 市政と都市社會の構造——同じく都市といつても帝國に對する關係から中世以來自由都市あるいは(帝國直屬都市)と領邦都市とに區別される。次に都市の獨立への苦闘の跡が歴史的に回顧され、自由都市と領邦都市とのあいだの差異が、それぞれの構造、市政、社會生活等について考察される。そして、これらの都市を下から震撼するものとして、ギルド組織の最下級の職人たちの階級意識の目ざめ、およびユダヤ人問題が論じられている。ギルド組織は法律的には一七八一年に禁止されたにもかかわらず職人のワンデルングの風習はある部門においては十九世紀までも存続していたことは、いかにドイツの商工業の近代化がまちまちであるかを示すものである。もっとも、このワンデルングの風習がドイツ人の自然感情と放浪癖とをいかに培い助長したか、それはドイツ文學、ことにローマン派の文學にしばしば見られるところである。

第四章 都市の建築と市民の私生活、外觀、教育——この章ではまず都市の建築について、それがその都市の性格といかに相關關係にあるかが説明される。各都市にはそれぞれの建築條令があり、フランクフルトでも一七一九年に住宅建築の規定が定められたことが、ゲーテの『詩と眞實』のなかに語られている。都市の公衆衛生は十八世紀には大いに改善されたものの、

それまでがお話にならぬ程度であった。上下水の設備もほとんどなく、ベルリンでは一六八一年になってようやく街路で豚を飼育することが禁じられたというくらいである。照明はもっぱら自家製のローソクで、十八世紀の後半に石油ランプがようやく用いられはじめた。マッチは一八二〇年までドイツ人には知られなかった。さいごに家庭内のありさまについて、ゲーテの語る彼の父親の「家庭の暴君」ぶりが決して特別な例外ではなかったことが理解される。それほど父親の權威は絶対であった。それに引きかえ女性の地位は相變らず低く、當時の一イギリス婦人記者のことはをかりれば、「結婚したドイツの女性は單に上級の召使」にすぎなかった。

第五章 専門家の出現——「専門家は近代の産物である。中世においては、言うまでもなく教會が何世紀間も教育と學問とを獨占していた。牧師と修道僧が辯護士、公吏、醫師、教授、教師であった。」ルネサンスと宗教改革以來、教會の俗世的勢力が衰えて國家の權威が増大するとともに、俗人が教育擔當者として社會面に登場し、大學もしだいに古い傳統を脱皮しはじめた。ここで著者は十八世紀の高等教育の實情と、宗教改革以後の大學の發展とを、ハレ、ゲッティンゲン兩大學を例にあげて述べ、さらに哲學、神學、醫學、法學の大學四科について、それぞれの卒業生の社會的地位と活動狀況とを報告している。しかし、ここではドイツの醫學が當時どのようなものであったかについて、著者の報告を簡單に紹介するにとどめよう。

大學を出た醫師は *Medicus parisi* として町醫者よりも社會的に高い地位を持っていた。町醫者は大むね教育も低く、中にはあやしげな刺絡療法に萬事をまかすような床屋ベドムと區別のつきかねるような者もいた。(ドイツでは、床屋は昔は簡單な外科的療法をも行つた。)しかし、大學の醫學研究も十八世紀のはじめには非常に貧弱で、わずか二、三名の教授がもっぱら講義だけを行い、解剖と臨床講義はほとんどしなかつた。それが世紀の終りには大いに充實して主要大學では少くとも解剖、實驗、臨床の設備を持つようになった。たとえばウィーン大學は九講座(一七八〇年)、ゲッティンゲン大學は六講座(一七八四年)を持ち、學生數はゲッティンゲン大學では五〇ないし八〇名、イエーナ大學では一七名であつた。しかし、これを當時の外國の大學とくらべるといかにドイツの大學がおかれていたかが明瞭になる。十八世紀のはじめライデン大學は三〇〇名の醫學生をかぞえ、エディンバラ大學では十八世紀後半に四〇〇名をかぞえた。ドイツの醫學の優秀さが世界的に認められるようになったのは十九世紀にはいつてからで、それまではドイツ人の多くはライデン、ユトレヒト、パリ、ストラズブルストラスブルクの各大學に學んだ。一七二五年に公布されたプロイセンの醫學條令プロシヤの醫學條令によつて醫科の卒業生は國家試験を受けた後、ベルリンの王立解剖學研究所で聽講する義務が課せられた。同じような條令は他の國にも實施され、ようやくドイツの醫學は急速の進歩の段階にはいつた。

書 評

第四部 文學への影響

第一章 文學に關する職業——ドイツの著述家が文學を職業の手段として生計の資をそこに仰ぐようになったのは十八世紀の後半であつた。それまでは私財のあるもの以外は、收入の道を文學以外に、とくにバトロンの仰いでいたのである。この點においてもイギリスはドイツに一步先んじていた。その國ではすでに十八世紀のはじめに讀者層の擴大に伴いバトロン制は少くなり、さらに雜誌と小説の流行、巡回文庫の普及とによつて、出版者に巨萬の富をきずくものがあらわれ、著述家の生活も従つて豊かになつた。著者がここにあげた例の中から二、三拾つてみると、ゴールドスマスは一年に一八〇〇ポンド、アーサー・ヤングは一〇〇ポンドの收入があつた。この趨勢は十九世紀にはいると更に進んでスコットは『湖上の美人』だけで四〇〇〇ポンドという最高のレコードを打ち立てたという。十八世紀のドイツではこのような輝かしいレコードはとうてい望めなかつた。イギリスにくらべてバトロンも少く、讀者層も貧弱であつた。さらに重要なことは著作權の確立していなかつたこと、ドイツの著述家とくに詩人に、金錢のためにペンを執ることをいさぎよしとしない考えが根づよかつたことである。ゲーテは『詩と眞實』の第三部第十二章で、クロップシュトックがドイツの文學者の社會的地位の向上に貢獻したと同時に、彼らの家庭生活の安定と改善とに盡力した事實を述べ、それまでの實情

について次のように言っている。

「以前は出版業というものは重要な學術専門書とか、たいして報酬を拂ふ必要のない常例の出版物に關係していたものである。文學者の制作はなにか神聖なもの見なされて、報酬を取ったり、またはそれを高くしたりすることはまるで聖物賣買のように考えられていた。」

しかし、このクロップシュトックの努力もゲーテによれば成功したとは言えなかった。出版者からの眞の獨立を非常な忍耐をもってたたかいた最初の文學者はレッシングだった。イギリスにくらべてドイツがこのように後れていた原因は、前に述べた以外に、貴族階級の知性の貧困、宮廷人のフランス趣味かぶれ、資本の不足等が数えられるほか、著作権が確立していないこともその重要な原因の一である。イギリスでは著作権法はすでに一七一〇年に議會を通過したのに對して、ドイツでは政治的經濟的分裂が障害となつて、全ドイツに適用される著作権法は十八世紀にはついに實現しないで、一八二八年のゲーテ著作集の決定版の時をはじめて實施されたという。

しかし、文學者の物質的條件は次第に改善されて行つて、ゲーテ、A・W・シュレーゲル等古典期およびそれ以後の一流の文學者の収入はかなり高額になつた。しかし、その場合でもイギリスのそれとくらべるとお話しならなかつた。著者のあげた例の中から一つだけえらんでみよう。「ゲーテは生前コッタ書店から約二萬二千ポンド受取つた。この額はゲッセン書店が

彼の最初の著作全集に支拂つた三百ポンドを加えて、彼の文筆収入のほとんど全額をあらわすものであつた。してみるとスコットの文學作品による三ヶ年の収入は、ゲーテが長い生涯にわたつて得たよりも多かつたことになる。」

なお本章においては、ドイツにおける巡回文庫の起源と發達、新聞雜誌の普及等、一般ジャーナリズムの情勢が解説されている。それにつれて文學界もしだいに活氣をおびてくるのだつた。最後に著者はつぎのようにこの情勢の歸結をもつて、この章をとりじている。

「一七四〇年と一八〇〇年とのあいだにドイツは、あらゆる教養人が外國文學に自分の教養の糧を仰いでいるような國民文學の點で非生産的な國から、詩人と思想家の國に變つた。これらの詩人と思想家のうち歴史にのこる少數のものは、無數の第二第三流の作家文筆家の廣大な基盤の上にそびえるピラミッドの頂點であつた。換言すれば、古典主義文學の隆盛と共に知的プロレタリアートともいふべきものが發生したことを意味する。」

第二章 文學におよぼす政治的經濟的社會的要素の影響——まず、ドイツの小國分立主義と絶對主義のドイツ文學におよぼす影響として、著者のあげていることは、ドイツにはロンドン・パリのようなメトロポリスのないことである。ゲーテが晩年（一八二七年五月三日）エッカーマンに語つた次の言葉のなかにもこの嘆きを感じられる。

「パリのような都市を考えてみたまえ。そこでは大國のすぐれた人々が一ヶ所に集まって毎日のように交渉しては論争と競争とに相互に刺戟し合い、向上をはかっている。そこでは全世界の自然と藝術のあらゆる領域の最善のものが日ごとに人々の目の前に公開される。一つの橋を、一つの廣場を通るたびごとに偉大な過去が思い出され、どの町角にも歴史の一角が展開されるのだ。そのような世界的都市を思ってみたまえ。」

以上の言葉は裏がえせば、ドイツに普遍的な教養と國民的様式のないことを意味する。さて本書の著者は、このゲーテの言葉をうけて次のように言う。「そのような國家的傳統と、それを支える政治的制度とがないにもかかわらず、古典主義の文學を生むことに成功したということは注目すべきことである。もっとも、フライタークの言葉をかりれば、ほとんど奇蹟といつてもいい肉體のない魂の創造ではあったが。」

ドイツの古典文學が創造されるにあたって、いかに政治的障害とたたかったか、それについてのゲーテのはげしい怒りは『文學上のサンキュロット主義』(一七九五年)のなかに吐露されている。

つぎにドイツの分裂がドイツ文學におよぼした影響として、著者はその非社會性をあげている。この場合も、その原因として大きな國家的中心のないことが第一にあげられる。が、さらに、商工業の状態、コミュニケーションの不備と不統一、階級の對立等があげられている。かくして「文學は地方の孤立し

た牧師や公吏の仕事となるか、地方都市の小さいグループのメンバーの仕事となった。」さらに著者は、ここでもフランスと比較しながらスタール夫人の「esprit de conversation」とドイツ人の非社會的な個人主義」という言葉を援用して説明している。そして次のように結論する。

「要するにフランス人は社會への依存を充分すぎるほど意識している。そしてドイツ人はあまりにも意識しなすぎる。この考えはさらに、フランスの批評家にとっては自明のことであった。この考えはさらに、フランスの古典主義文學の起源をサロンにまで跡づけたテーヌによって發展された。また、ブリュンティエールはフランス文學の眞に社會的な性格を強調し、その *esprit* のこそはフランスの劇作家、文章家、モラリスト、雄辯家の優秀さを明示するものと思っていた。リリシズムは彼らの長所ではない。外國人には、フランスの作家はしばしば深みに缺けているように見える。なぜなら、彼らのえらぶ題目は一般人にとって興味あるものであり、できうる限りそれが明瞭になるように苦勞するからである。それに反してドイツの作家は、自分にさえ納得がいけばそれで満足する。他人が彼を理解することに困難を感じれば感じるほど、彼自身の思想の深みを確信するのである。」

ゲーテも以上のような考え方に決して反對ではなかった。いな、フランス人の社交性と明朗性がドイツ人に缺けていることを常々残念に思っていて、エッカーマンにも「ドイツ人と

つては概して哲學的な思辨が妨げとなつて、彼らの文體にしばしば抽象的な理解しがたい、くどくどしい性格をもたらずの「だ」と言っている。しかしながら、ゲーテは楯の他の面も見のがさなかつた。長所は一面において短所でもありうる。彼は當時のドイツの作家が、明瞭に把握しうる大衆のために書くことという希望をいだいて物を書くことができなかったということから結果する短所と同時に長所をも見ていたのである。ただ、ドイツの作家には、フランスやイギリスの最も超俗的な作家ですらたえず經驗している現實社會からの引き綱に缺けていたのである。

このようなゲーテの考えに導かれて、著者はドイツ文學の積極的な面すなわち特色を列擧して説明している。ここでは項目だけをならべておくにとどめよう。個人主義、獨創性、徹底性、自由思想、抒情性、誠實性、外國思想に對する開放性、教養への努力、世界主義等である。

最後に著者は、十七世紀以來のドイツ文學の發展を政治的經濟的社會的背景の上に展開している。ここにも、あるいはここにこそ、著者の独自の見解がうかがわれるのであるが、私はここではただシュトルム・ウント・ドラングの解釋を簡単に紹介して彼のすぐれた見解の片鱗をうかがうことにしよう。

「七十年代のシュトルム・ウント・ドラングの若い作家は、普通彼らの先輩と同じ社會的階層の出身とされてきたが、しかし、彼らは、現代的な言い方をすれば、はるかに階級意識に目

ざめ、従つてはるかに革命的であつた。フランスの社會批評家、とくにルソーに心酔しつつ、彼らはくりかえし階級間のたかひを表現し、ほとんど常に中産階級の味方をする。彼らは當時の社會の描寫において客觀的からはほど遠く、彼ら自身の階級を不幸な、しかし道德的な階級となし、貴族を腐敗した尊大な幸運の寵兒となしている。彼らは中産階級の缺點を見ないわけではない。すなわち見解の狭さを、ある者には上長への隸屬を、またある者には粗野な不作法を認めた。しかし、それらは社會的條件のせいだと説明する。

「彼らの書いたもの一般的な傾向は自由主義的といつてもいいだろう。彼らを怒らせたのは中産階級の經濟狀態ではない——農民や都會の貧しい労働者ではなおさらない——それは社會的身分において、また法律上の特權において、貴族と同じでないということである。君主それ自身が直接に批判されたことは一度もない。シュトルム・ウント・ドラングの最も大膽な劇といわれる『たくらみと戀』においてすらそうなのである。非難されるのは常に彼の相談役か取りまき連である。そこには政治的叛亂へのなんらの刺戟もない。これらの作家はむしろ心情的にアッピールすることによって、彼らの階級の着實な功績を認めてもらい、彼らの權利的擴張と、精神的價値にふさわしい世人の尊敬とを確保しようと思う。彼らは主として彼ら自身の屬する中産階級のなかの一部、すなわち都市における多かれ少かれの教養ある裕福な一部に關心をいだし、田舎者や貧しい都會人の

生活には通例、無關心であり、また無知でもある。

「たいていのシュトルム・ウント・ドラング人はそれ故、まもなく宮廷と和を結ぶようになる。彼らのうちの最年少者シラーが『群盜』と『たくらみと戀』とを八十年代に發表する以前に、すでにゲーテとヘルダーはワイマルの高い官職に任ぜられ、レンツはゲーテの例にならおうと企て、クリンガーは輝かしい前途を約束するかにみえるロシアの宮廷で出世の途を踏み出した。」

しかしながら、このような妥協にもかかわらずシュトルム・ウント・ドラングが來るべきフランス革命への精神的準備であったことは否定することはできない。この妥協の後に登場する、フマニテートを基調とするドイツ古典主義が社會的にどのような孤高な立場をとらざるをえない運命におかれていたかも、理解されるであろう。しかし、この問題にふれることは本書の紹介の範圍外に逸脱するおそれがあるので、今は以上でとどめておくことにする。

(一九五六・一一・二五)

(一橋大學教授)